私と美術との出会い

町内在住で川俣美術の会員として町内外で活躍するお２人に美術との出会いについて聞きました。

誰かの感性に働きかける絵を

藤守 可江（佐藤　守）さん

忘れられない絵

絵を描き始めたきっかけは定かではないのですが、絵を見て最初に感動した１つに小学校６年生のときに見たミレーの「羊飼いの少女」があります。幼いころから農作業の手伝いをしていた私は、朝夕刈った草を牛に与えることが日課でした。その帰路の風景とこの絵が重なり私の感性に働いたことが美術の世界に足を踏み入れるきっかけになっているのかもしれません。その後、油絵を中心に静物画や人物画を描いてきましたが、高校教員定年退職を機に約 10 年前から本格的に透明水彩の絵を描くようになりました。

美しい日本語と心に響く情景の重なりから

自然の中で育ってきた私にとって、季節の移り変わりや水のある景観はとても魅力的であり、絵心がかき立てられる題材です。町内や旅先で巡り合った感動や心地よい気持ち、心に響く情景をそのまま絵に表現したいという気持ちで取り組んでいます。また、私の場合は絵を描く前にタイトルを決めているのですが、それは日本に古くからある大和言葉など美しく、趣ある言葉です。その言葉をストックして、その言葉と私の心に響いた情景が重なった時に絵を描きたくなります。

自分の好きを描く

神野 洋子さん

日本画との出会い

私が絵を描き始めたのは 18 年前、大きな病にかかり落ち込んでいた時です。「没頭する何かがほしい」と思っていたところ、近所の方から街中で川俣美術主催で開催されるスケッチ教室に誘われ絵を描き始めました。その後、元同僚が日本画の教室を開いているということを知り、そこで日本画を習い始めたのですが、伝統的な技法や天然素材による独特の色彩といった魅力に心を掴まれて、毎年少しずつ作品を描いています。

自分でも描きたい、その想いが原動力

私が絵を描きたくなるのは、夫と旅行に行ったときが多いです。全国さまざまな場所を訪れてきましたが、ふと「今見ているこの景色を絵でも描いてみたい」そう思う瞬間があります。「あの紅葉のグラデーションはどう描こうかな」「この花はどう咲くのかな」そんなことを考えながら景色を眺めてしまうのです。これからもそんな景色と同じように「誰かの心に残る絵」を描き続けてたいです。

特別対談

川俣美術の100年とこれから

現在、川俣美術の会長を務める菅野浪男さんと川俣美術の会員でありながら羽山の森美術館運営委員として今回の川俣美術百周年展の企画にも携わった藤野美由希さんにお話を聞きました。

百周年を迎えて

藤野 ラ・パレット時代から川俣美術に所属している浪男さんの百周年を迎えた今のお気持ちをお聞きしたいです。

菅野 私が絵を描き始めたのは小学4年生の頃。当時、担任だった先生がラ・パレットに所属していたことから、私も自然と絵を描き始めました。さらにいうと小学4年生の先生以降、高校生になるまで担任の先生は全員ラ・パレットに所属していました。

藤野 コバルト社時代に開催された「第1回展」が川俣染織学校で開催されていますよね。それほど当時は学校との結びつきがとても強かったんですね。

菅野 そのとおりです。そして現在、15年前まで福沢小学校だった羽山の森美術館で百周年展を開催できること、その時代に生きていることをとても嬉しく思いますし、関係者のみなさんにとても感謝しています。

川俣美術百周年展

藤野 今回の展示を開催するにあたってコンセプトやテーマはありますか？

菅野 今回川俣美術を大きく3つの時代に分けて展示をしています。始まりの「黎明期」展開の「躍動期」自由の「多彩期」です。みなさんには3つの時代の違いも楽しんでもらいたいと思います。

藤野 私は川俣町にこれほどの文化があるということを絵に描かれた歴史とともにみなさんに知ってほしいと思います。

菅野 そうですね。羽山の森美術館で初めての企画展は「町民が愛した丸樹長三郎」と題し、みなさんが持っている丸樹さんの絵をお借りして開催しました。それほどに丸樹さんの絵は、川俣美術は川俣町の暮らしとともに存在していました。今回その文化を認識してもらえたら嬉しいですね。

川俣美術のこれから

藤野 今年で百周年展という節目を迎えましたが、川俣美術のこれからについてはどうお考えですか？

菅野 展示を見てもらえれば絵はその町の文化や歴史が描かれていることが分かるかと思います。町の地形や絹織物といった産業、災害など、まさに絵は時代を写す鏡です。これまで「コバルト社」「ラ・パレット」「川俣美術」とそのあり方を時代とともに変化させてきましたが、今後も川俣町の歴史とともに川俣美術があることは不変です。

みなさんへひとこと

藤野 絵を鑑賞するにあたってみなさんには難しく考えずに鑑賞してもらいたいと思います。歴史的背景などはありますが、「この絵がなんとなく好きだな」「この絵はあの場所かな」のように見た目で鑑賞するのもいいし、なんとなく眺めるだけでもいいと思います。まずは美術館に足を運んでいただければ嬉しいです。

菅野 15年前、震災があり、避難を余儀なくされ、一度は人生がバラバラになる感覚に陥りましたが、川俣美術や羽山の森美術館との関わりの中で、自分の人生に一本の軌跡が描けたと思っています。みなさんにも羽山の森美術館に携わること、絵を見に来ることで人生の豊かさに繋がっていってほしいと願っています。

菅野 浪男（なみお）

現川俣美術会長。小学4年生のころに「ラ・パレット」に通い始め帰郷を機に入会。2008年より会長を務めている。

藤野 美由希（みゆき）

現川俣美術会員。高校生から油絵を始める。また羽山の森美術館運営委員として企画展運営とともに、収蔵品管理人として収蔵品の管理などを行っている。